

地域包括医療に貢献する 病棟・外来・保険薬局の薬剤師連携

～京都第二赤十字病院薬剤部における取り組み～

京都第二赤十字病院薬剤部では、病棟専任薬剤師と薬剤師外来担当薬剤師が、患者さんの治療経過や問題点など情報を共有し、退院後も含めた長期的な副作用モニタリングや処方提案などを行うことで、患者さんの安全な薬物治療及びQOL向上に寄与しています。また保険薬局とも、院外処方箋の検査値印字など患者さんの情報共有を通じてシームレスな医療連携に取り組んでいます。がん診療における病棟・外来・保険薬局、それぞれの薬剤師の業務と連携状況についてお話を伺いました。



薬剤部長
友金 幹視先生



薬剤指導管理課課長
神田 英一郎先生
がん薬物療法認定薬剤師
《薬剤師外来担当》



注射調剤課係長
加藤 良隆先生
外来がん治療認定薬剤師
《病棟専任薬剤師》



元・第一薬局 薬剤師
長岡 瑞世先生

I 地域の医療安全を 薬剤師が担保

薬剤部の方針と、現在注力している取り組みをお教えください。

友金 薬剤部では、「『正確・迅速・良質・親切そして判りやすい』調剤を目標に常に薬剤師としての資質の向上を図り、医薬品の適正使用と適正管理を通して、患者さんの健康に寄与できるように努めます」という理念を掲げ、業務に取り組んでいます。また、業務の中で生じた疑問を臨床研究のテーマとし、学会発表や論文化することで自己研鑽に励んでいます。

更に安全で質の高い医療を提供するため、「医療安全に向けては無限の努力をする」というスローガンも掲げています。病棟業務においても、各自が絶えず医療安全への問題意識をもって活動しています。地域連携を通じた医療安全への貢献も目下の大きなテーマです。院外処方箋への検査値表記やトレーシングレポート(服薬情報提供書)機能の付加などにより、保険薬局との情報共有を進めています。2017年9月現在、近隣8薬局を中心に連携し、年3回の意見交換の場を設けています。

II がん診療における 薬剤師の連携

病院薬剤部と保険薬局が、一体となって
患者さんをフォロー

薬剤師による地域連携は、どのような形で進めていますか。

友金 入院中から退院後まで、患者さんがシームレスに一貫した指導が受けられるよう、病院薬剤部と保険薬局が一体となって患者さんをフォローするのが、連携の理想的な在り方だと考えています。具体的には、入院中の患者さんに関して病棟専任薬剤師が取得した情報を、退院後は薬剤師外来と保険薬局が共有し、保険薬局の指導内容を病院に適宜フィードバックします(図表1)。

当院の外来患者さんへの関与は、がん化学療法患者を中心に化学療法センターにてアプローチしてきた経緯があります。その中で、経口抗がん薬服用患者に対する関与が手薄となり、副作用発現時に即時対応できなかった経験を機に、経口抗がん薬単独治療を受ける患者さんに対して完全予約制の薬剤師外来を2014年11月に開設しました。

【病棟専任薬剤師の活動】 医師や看護師からも患者さんの情報を収集

がん患者さんの治療では、病棟専任薬剤師として、どのようなことを心がけていますか。

加藤 患者さんの入院直後は、まず患者さんの情報収集に努めます。面談や電子カルテなどから検査値やバイタルに関する情報を収集するだけでなく、医師や看護師からも治療方針や日常生活などについて詳細な情報を得るように心がけています。

また、患者さんが医師から受けた説明を聴取し、がん治療への不安はもちろん、家族関係などプライベートな面も含めて患者さんとお話しし、ほかの医療スタッフとも連携してサポートしていきます。退院時には、入院中に使用した薬剤や、退院後の服薬上の注意点などを記載した「退院指導書」を使い、患者さんに丁寧に説明します。この退院指導書に記載された情報は、退院後に患者さんの指導を行う薬剤師外来や保険薬局でも共有しています。

【薬剤師外来担当薬剤師の活動】 入院中と同等のきめ細かな指導を実施

がん治療患者さんを対象とした薬剤師外来の業務についてお教えください。

神田 外来での内服抗がん薬治療の質と安全の向上を目的に薬剤師外来は開設されました。1枠20分の予約制ですが当日予約にも対応しており、1カ月の利用患者数は約50名です。

初回は医師の診察後に介入し、患者情報を確認した上で、服薬方法や副作用・日常生活での注意点などの説明を行います。2回目以降は、医師の診察前に患者さんの服薬状況や副作用状況を確認し、電子カルテを用いて主治医にその情報を伝達、状況に応じて支持療法の提案を行います。

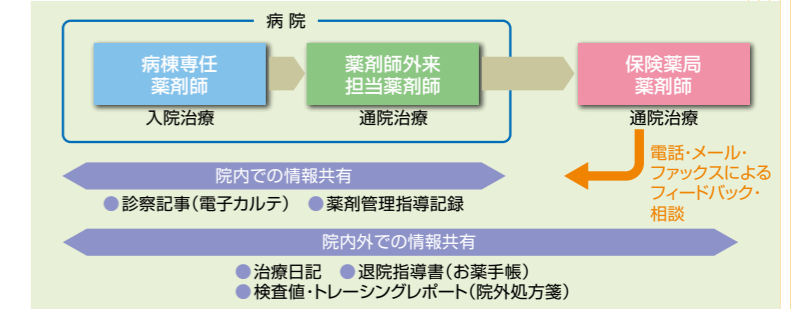
当院の薬剤師外来は、主治医の依頼を受けて行う形にしています。入院患者さんを外来へとシームレスにフォローしていけるよう、病棟専任薬剤師から主治医に対し、薬剤師外来活用への働きかけも行っていきます。

【保険薬局薬剤師の活動】 自宅での服薬支援にも注力

保険薬局では、どのような事柄に留意して患者さんを指導しているのでしょうか。

長岡 入院中に受けた指導内容を確認し、病院と差異のない指導を第一に心がけています。高齢のがん患者さんでは、抗がん薬以外の併用薬を服用中の方も多くいらっしゃいます。相互作用に注意を要する薬剤もあるため、併用薬のチェックも入念に行っています。

図表1 病棟専任薬剤師・薬剤師外来・保険薬局の連携の流れ



自宅での服薬支援も、保険薬局薬剤師(以下、薬局薬剤師)の役割です。患者さんの状況を見て、一酸化や服薬カレンダーの活用などをご提案することもあります。体調の異変があっても伝えていただけないこともあるため、ご家族や介護者などのキーマンともお話しし、少しでも気になる様子が見られれば相談していただくよう伝えていきます。

III 病棟・外来・保険薬局による 連携の実際

薬剤師間の具体的な連携方法についてお教えください。

● 電子カルテへの記載

加藤 入院中から退院後まで首尾一貫した指導を行うために、様々なツールを活用しています。

入院中は、電子カルテの「診察記事」や「薬剤管理指導記録」を詳細に記入します。薬剤師外来担当者が見て、患者さんの問題点や留意点を把握しやすいよう、患者さんから詳しく話を聴き、できるだけ具体的に現状や問題点を電子カルテに記載するよう留意しています。

神田 薬剤師外来で行った指導内容や主治医への伝達事項も診察記事に記載し、ほかの医療スタッフと情報共有しています。

● 治療日記

神田 患者さんが日々の症状を記録できる、当院作成の「治療日記」も活用しています(次ページ図表2)。入院中に病棟専任薬剤師から患者さんへ記録方法について説明し、外来治療へ移行後も継続して記録してもらうことで患者状況の把握に努めます。薬剤師外来では、治療日記を患者さんと見ながら服薬や副作用の状況を確認し、支持療法の提案に繋がっています。

● 退院指導書

加藤 退院時には、薬剤師外来担当者と直接会って患者さんの情報の申し送りをするほか、退院指導書

(図表3)も活用します。患者さんの同意を得た上で、その縮小版をお薬手帳に添付し、患者さんに薬剤師外来や保険薬局に持参してもらうことで、情報共有を図っています。

長岡 薬局薬剤師側では、退院指導書や治療日記に記載されている事柄を、患者さんに再度確認するよう留意しています。例えば「湿疹が出たときに塗り薬を使うと退院指導書に記載されていますが、このお薬ですね」と、実物を見せて確かめます。

● 院外処方箋への検査値表記

友金 院外処方箋には、WBCやeGFRなど18項目の検査値と、その基準値を掲載しています(図表4)。検査値は、過去4カ月間の直近2回分のデータを記すことで、薬局薬剤師が経時的な変化を見て、疑義照会の必要性を適切に判断できるように配慮しています。

長岡 薬局薬剤師が、患者さんのお話だけに基づいて医師に疑義照会するのは困難です。検査値の推移を把握することで、適切に疑義照会が行えるのは非常に有意義です。

● トレーシングレポート

友金 トレーシングレポート機能(図表4)も、検査値とともに院外処方箋に付加しています。保険薬局には、これに患者さんから得た情報などを記載した上で、薬剤部宛にファックスで送ってもらいます。報告内容で特に多いものは、腎機能低下による疑義照会後の処方変更内容の報告や残薬調整結果報告です。送られて来たレポートは、スキャンして電子カル

テに保存し、次の受診までに主治医に確認してもらうようにしています。

処方変更を要すると判断される疑義は直接外来担当医に、緊急性はないが次回処方時に検討を希望する内容はレポートで報告するなど、両者を適切に使い分けてもらうよう保険薬局に促しています。

なお、保険薬局からの疑義照会後の処方変更については、PBPM*(プロトコルに基づく薬物治療管理)により病院薬剤師が電子カルテに代行入力できるように取り決めていきます。

*PBPM: Protocol Based Pharmacotherapy Management

IV 電話・eメールによる相互連絡

● 病院薬剤部と保険薬局での情報共有の手段は、ほかにもありますか。

友金 トレーシングレポートとして処方箋をファックスで送ってもらうほか、疑問点や相談などがあれば、その都度電話やeメールなどを使って連絡を取っています。

● 患者対応に窮した際の相談

長岡 実際に私が体験した症例ですが、ある患者さんから今後の治療方針について聞かれ、回答に窮したことがありました。そこで、病棟専任薬剤師に電話で連絡をして、主治医に治療方針を確認してもらいました。その後、治療方針は主治医の許可を得て、病

棟専任薬剤師から説明してもらいました。

加藤 医師に近いところにいる病棟専任薬剤師は、薬剤師外来担当者や薬局薬剤師が患者対応に難渋したときに、電話やeメールで相談を受け、医師との橋渡しをすることができます。その意味でも、すぐに連絡し合える関係は意義深いと言えます。

● 長期治療を受ける患者さんへの指導

神田 再診まで3カ月の間隔があいた患者さんでは、保険薬局との間で次のような連携例がありました。

診察後1カ月目に薬局薬剤師から報告を受けたのですが、その内容は「過去に中止になった抗がん薬が自宅に残っており、飲み間違えないように薬局で預かってほしい」と依頼を受けたというものでした。この連絡から、患者さん自身が保険薬局とともに服薬管理に取り組んでいることが伺えました。

その後2カ月目には、患者さんが不安に思われている内容について情報提供を受けました。事前に準備しておくことで、次回薬剤師外来での介入時にその不安にしっかり寄り添うことができました。

3カ月目の受診後、保険薬局に「自宅血圧測定の遵守と高マグネシウム血症への注意喚起」を依頼したところ、保険薬局から「血圧手帳の交付と、高マグネシウム血症に対する理解を再確認した」との連絡を受けました。薬局薬剤師との協働により、適切な副作用対策を図ることができました。

この事例のように、外来患者さんの近況を病院薬剤師がタイムリーに把握するには、薬局薬剤師との連携

が不可欠です。患者さんにとって身近な存在である薬局薬剤師が密に情報を収集し、病院薬剤師と共有を図り、協働して患者さんをサポートするといった体制の構築が必要です。今回のような連携が継続できれば、抗がん薬治療に対する患者さんの不安が軽減し、QOLの向上、医療安全の向上に繋がると思います。

V 地域全体で患者さんをサポートするために

● 最後に、薬剤師の連携について、今後の抱負や展望をお聞かせください。

長岡 患者さんのご自宅を訪問して服薬指導することも、薬局薬剤師が担う大切な役割です。患者さんの身近な存在として、安心して治療を受けてもらえるよう今後もサポートしていきたいと考えています。


加藤 検査値など、病院薬剤師が日頃から目にしていない情報でも、薬局薬剤師にとっては見慣れないことがあります。どのような情報を保険薬局に提供していくのが望ましいのか、実際の連携や地域勉強会などを通して探っていききたいと思います。

神田 連携のための環境は整備されつつあるので、今後は、薬局薬剤師からの活発な情報提供を呼びかけていきたいと思っています。患者さんの些細な声でもフィードバックしてもらうことで、処方提案に活かせるケースも多いはずなので、薬局薬剤師と意見交換できる場を更に数多く設けていきたいと考えています。

友金 退院する患者さんの中には転院というケースもあります。慢性期や回復期の病院との連携部署としての「入退院支援課」に薬剤師を配置するなどの関わりも重要だと考えています。

薬剤師外来については、経口抗がん薬を服用する患者さんの指導以外にも、呼吸器疾患患者さんへの吸入指導、糖尿病患者さんへの自己注射指導、C型肝炎患者さんや脳卒中再発予防外来患者さんへの介入など、着々と領域を広げています。今後も患者さんが安心して治療を受けられる取組みを進めていきたいと思っています。

日本赤十字社 京都第二赤十字病院
 京都府京都市上京区釜座通丸太町上ル春帯町355-5
 院長:小林 裕
 開設:1912年
 病床数:672床
 診療科:29科
 薬剤師数:52名
 薬剤技能補助者:11名
 (2017年9月現在)

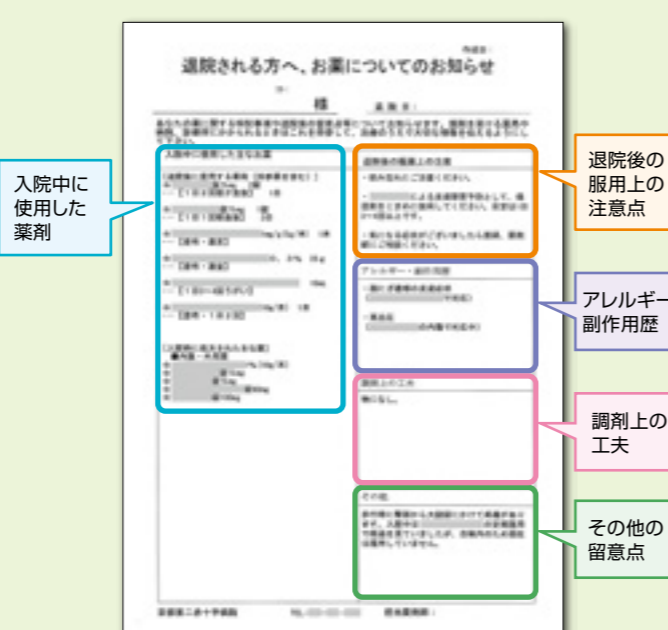


図表2 治療日記(記入例)



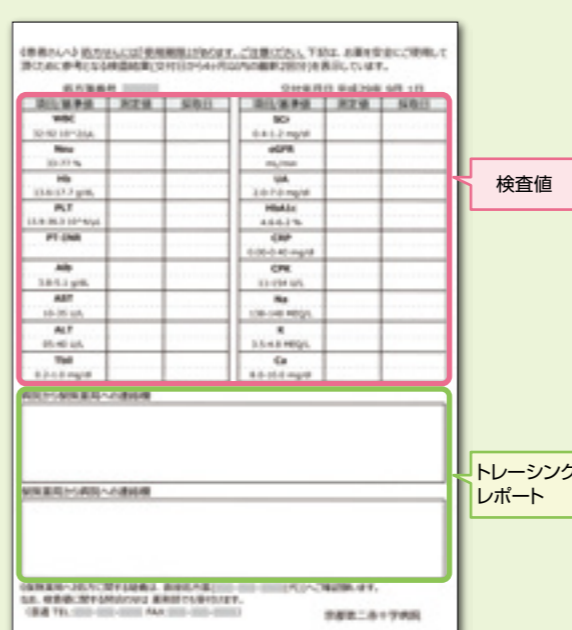
患者さんは、体温・体重・血圧、食事の量や吐き気、排便回数、副作用などの身体状況を自記録する。
 提供:京都第二赤十字病院薬剤部

図表3 退院指導書



提供:京都第二赤十字病院薬剤部

図表4 院外処方箋に掲載された検査値とトレーシングレポート



検査値とトレーシングレポートは、院外処方箋の右側に掲載している。
 提供:京都第二赤十字病院薬剤部